

日本比較文化学会・中部支部ニュース

第 12 号

2019 年 7 月 15 日発行

2018（平成 30）年度 中部支部 総会報告

（中部支部長：白鳥 絢也）

2018（平成 30）年度の中部支部総会は、日本比較文化学会中部支部平成 30 年度例会（愛知大学豊橋キャンパス，2019.3.23）にて開催されました。以下、簡単に議事を報告します。

○報告事項

1. 中部支部会員数について

白鳥支部長が 40 名（平成 31 年 2 月現在）であると報告した。

2. 中部支部ニュースについて

白鳥支部長より、中部支部ニュース第 11 号（2018 年 5 月 7 日発行）が大崎広報を編集主幹として発行されたことが報告された。

3. 中部支部第 10 回支部大会について

白鳥支部長より、中部支部第 10 回支部大会（2018（平成 30）年 11 月 11 日（日），於・椋山女学園大学）が開催されたことが報告された。

4. 中部支部主催「香港スタディツアー」について

澤田副支部長より、平成 30 年度中部支部事業である「香港スタディツアー」について、スライドを用いて詳細な報告がなされた。期間は 2018（平成 30）年 12 月 7 日（金）～10 日（月）。

5. 関西・中部・関東支部合同例会について

白鳥支部長より、関西・中部・関東支部合同例会（2019（平成 31）年 2 月 9 日（土），於・東京未来大学）が開催され、白鳥支部長の出席及び中部支部会員 2 名の発表があったことが報告された。

6. 支部役員会について

白鳥支部長より、支部役員会が以下の通り開催されたことが報告された。

- ・第 1 回 2018 年 9 月 16 日（日） メール会議
- ・※ 2018 年 11 月 10 日（土） 支部幹事への役員会参加依頼メール
- ・第 2 回 2019 年 1 月 8 日（火） メール会議

○審議事項

1. 平成 31 年度事業計画

白鳥支部長が以下の事業計画を提案し異議なく承認された。

- ・5 月頃：「支部ニュース」刊行
- ・6 月末：学会誌『比較文化研究』投稿〆切（※その後、査読依頼）

- ・10月末：学会誌『比較文化研究』発行
- ・11月頃：発送
- ・9～12月頃：第11回支部大会開催（※会場は未定）

2. 学会誌『比較文化研究』の編集について

澤田副支部長（兼・編集委員長）が学会誌『比較文化研究』の編集方針、査読依頼、今後のスケジュール等を提案し異議なく承認された。

平成30年度 日本比較文化学会中部支部 会計報告書

自：平成30年4月1日 至：平成31年3月31日

（単位：円）（摘要の日付は銀行取引日）

支出の部			収入の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
			前年度繰越金	51,949	
会場使用料 H30.11.11 椋山女学園大学	3,200	H31.3.20			
お茶代 H31.3.23 愛知大学	1,848	H31.4.2			
次年度繰越金	56,901		補助金（本部より送金）	10,000	H30.9.8
合計	61,949		合計	61,949	

以上の通り報告いたします。

平成31年4月29日

会計 安藤 雅之

会計 津村 公博

平成30年度 日本比較文化学会中部支部 監査報告書

平成30年度会計の収支決算について監査の結果、報告の通り相違ありません。

平成31年5月3日

監査 川口 雅也

2018（平成30）年度 中部支部 第10回大会報告

2018年11月11日（日）、椋山女学園大学において第10回大会が開催されました。以下、発表要旨を掲載いたします。（※敬称略）

○自由研究発表（一人発表20分＋質疑応答10分）

ブラジルの教科書における日系移民の歴史

白鳥 絢也（常葉大学）

津村 公博（浜松学院大学）

澤田 敬人（静岡県立大学）

本研究は、ブラジルの教科書を分析して、日本の子どもとブラジルの子どもと共通的テーマ・内容を掘り起し「共生」に役立てようとするものである。本発表では、ブラジル移民の歴史や市民性教育、日系人として生きることなどについて教科書の記述に注目する。

図1は、ブラジル大手の教科書会社が発行しているものであり、ブラジルも人気漫画「テウルマ ダ モニカ」が登場するものである。日系人が多く在籍している公立小学校に配布されており、日本の学校生活や文化などについて伝える内容となっている。また、図2は日系移民の歴史について触れられている箇所である。

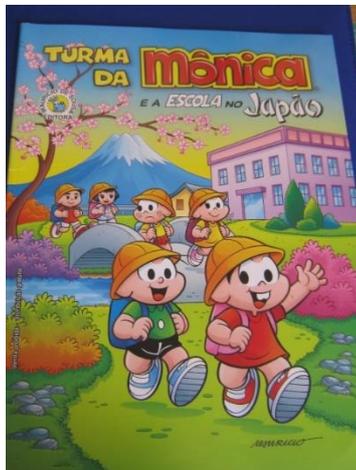


図1 「テウルマ ダ モニカ」

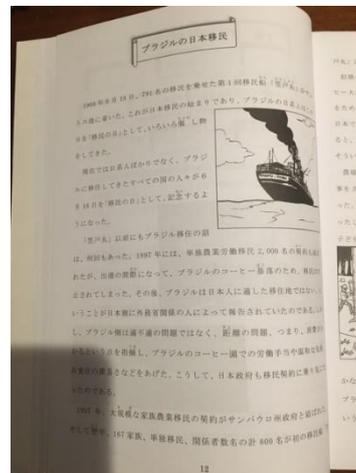


図2 「ブラジルの日本移民」

※本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（平成28-30年度 基盤研究（C）「国際化社会に生きる青少年の共生を目指した教材モデルの開発に関する研究」課題番号：16K04561，研究代表者：白鳥絢也）の助成を受けて行われたものであり、ここに謹んで感謝の意を添えます。

アグネス・キース『ボルネオ：風下の國』における 18 章の削除についての一考察

二村 洋輔（梶山女学園大学）

キプリングやモーム、コンラッドなどの作家たちと比べると、アグネス・キースは現代の日本においては全くの無名作家といってもいい。特に、第二次世界大戦以降、彼女の書いた小説は国内で再訳がされることもなければ、再版されることもなく、完全に忘れ去られているといえる。

しかしながら、彼女の処女作である『ボルネオ：風下の國』（1939：1940 邦訳出版）は出版当時の日本においてボルネオを扱った文学作品としては最もよく知られたものの一つであった。先行研究がこれまで指摘してきたように、『ボルネオ』は林芙美子や吉屋信子、里村欣三など、ボルネオを訪れた作家たちに読まれ、彼／彼女らに影響を与えた。また、元兵士の手記によれば、同著はボルネオに派遣されることが決まった兵士たちに、ボルネオを知るための好資料として配られていたという。

この本の興味深い特徴は、邦訳版で第 18 章-著者のアグネス・キースと日本人領事の妻が戦争を批判する場面が主となっている章-が丸ごと省かれて出版されていることである。これまでの研究の中でも、このテキストの改変について、言及こそあるものの、それは検閲のためになされたのであろうというごく簡単な推測が述べられているのみで、同章の削除が持つ意味合いについて有意義な議論はされてこなかった。

しかしながら、この章の削除には、ただ不適切な要素を取り除くということにとどまらない、より重要な意味がある。数ある章のうちの一つにすぎないこの章の削除は、テキストが本来もつ性格を大きく変えてしまうほどの影響力を持っている。本発表では、『ボルネオ』の第 18 章のもつ特徴を、同書の他の章との比較の中で検討した上で、その章が邦訳の中で意図的に、まるでそのような章など存在しなかったかのように削除されることの意味を考察する。

司法通訳者に対する訳し方についての調査

水野 かほる（静岡県立大学）

司法通訳、殊に法廷通訳においては、正確かつ法的等価を要求する完全な通訳を行わなければならないとされ、一般の通訳とは異なり、述べられたことについて、修正、割愛、付加をしてはならず、かつ説明を加えてはならないとされている。しかしながら、例えば法廷では、単に事実に関する情報がやりとりされるだけでなく、検察官が被告人を非難したり被告人が反省の気持ちを表し罪を認め謝罪するなど、様々な相互行為（コミュニケーション）が主に言語を用いて行われており、また訳出の際には通訳者が自らの主観によって語彙やレジスター等を選択・決定することから、通訳における参加者の意識（規範）と実践の間の乖離がしばしば発生することになる。さらに、通訳を介することによる変容の問題、通訳のプロセスに内在する特徴から発生する問題も正確な通訳の担保に関する議論では避けられない問題であろう。

司法通訳における等価性を保持した訳出の正確さについては、「言語使用域の等価」（Register equivalence）から「法的等価」（Legal equivalence）までの広い意味での等価性が上げられるが、裁判所の求める法的意図や法的効果の等価性を重視した通訳と、被告人にも分かる意味の等価性や訳文の分かりやすさを重視した通訳とは両立しないことも多いと考えられる。司法通訳者や法律家はこの「言語等価をどのように実現するか」という課題に対し、どのように認識しどのように対処しているのであろうか。そして適正な通訳実現のために今後司法通訳（法廷通訳）はどのようなべきであらうか。

以上の疑問に答えるため、司法通訳者に対してアンケート調査を実施した（2017年12月～2018年1月）。内容は、「通訳全般についての通訳に対する認識」、「捜査段階において通訳者／通訳のユーザーはどのように通訳／話しているか」、「捜査段階において通訳者／通訳のユーザーはどのように通訳／話すべきか」、「法廷において通訳者／通訳のユーザーはどのように通訳／話しているか」、「法廷において通訳者／通訳のユーザーはどのように通訳／話すべきか」である。本報告では、上記調査結果についての中間報告を行う。

日韓交換講演

[韓国]

題目：「韓国における人文学の研究形態について」

講演者：牟世鍾（仁荷大学校教授・韓国日本語文化学会会長）

主に日本語研究の立場から、韓国の学術のあり方が理系的な成果主義に過度に傾倒する方向にあり、人文学における学術のあり方を考えるといった内容になります。

[日本]

題目：「日本のポストドクター制度の課題」

講演者：澤田敬人（静岡県立大学教授）

研究に情熱を注ぎつつも、不安定な生活を余儀なくされている若手研究者を十分に活用できない日本の科学政策を採り上げ、課題を述べていきます。

コーディネーター：樋口謙一郎（椋山女学園大学准教授）

日本比較文化学会 中部支部 平成 30 年度例会報告

2019年3月23日(土)、愛知大学豊橋キャンパスにおいて平成30年度例会が開催されました。以下、発表要旨を掲載いたします。(※敬称略)

【第1部】勉強会

普遍的幸福論の研究—愛知地域文化から—

大崎 洋 (愛知大学総合郷土研究所)

愛知(尾張・三河)は日本の外縁地域の代表である。政治・経済・文化において日本の中心になったことはない。『愛知県の教育史』には「愛知県における教育・文化の現状を見ると、東は東京、西は京都・大阪に挟まれてその発達は低調。極端な表現であるが、東・西両文化の吹きだまりともいえる。」と著されている。幸福とは何かを念頭において、外縁の代表とされる、愛知の地域文化を考察することにより、普遍的幸福論を導きだしたい。具体的には、1. 地域社会と宗教との関わり(名古屋市)、2. 地縁組織の幸福論(名古屋市)、3. 菩薩としての細井平洲と平島町内会の今(東海市)、4. 渡辺崋山の現代的意義(田原市)、5. 大衆文化としての昭和歌謡喫茶(三河地区)からの考察である。

「1.」、「2.」は『比較文化研究 N0128、133』に掲載して頂いたもので、今回の勉強会では、「3. 菩薩としての細井平洲と平島町内会の今」からを中心に述べる。

内村鑑三が著『代表的日本人』の中で、江戸時代屈指の儒者とほめた、細井平洲(1728-1801)は尾張国知多郡平島村(現在は東海市荒尾町)の出身である。上杉鷹山の師としてあまりにも有名であるが、尾張藩に仕えてから藩校(明倫堂)の督学、継述館総裁として多くの功績を残している。そして巡村講話により身分の差別なく、領民に対しての教育に精力的に取り組んだ。まさにその行動は菩薩といえるものであり、封建社会ではあるが、誰よりも人々の幸福を願っていた。平洲没後290年になる今、出身地の平島町内会員に対して「平島町内会員への地域活動・幸福に関するアンケート」を行い、菩薩ともいえる平洲の精神がどのように息づいているかをアンケート結果から考察した。

さらに、「4. 渡辺崋山の現代的意義」からは、三河国田原藩の家老・文人画家・蘭学者として活躍し、最期は蟄居～自刃という非業の死を遂げた渡辺崋山(1793-1841)から幸福論という観点から学ぶ意義を、また「5. 大衆文化としての昭和歌謡喫茶(三河地区)」は、客が順番にカラオケを歌うという形式で、見ず知らずの人達が一緒に歌を歌って楽しむ空間である歌謡喫茶(カラオケ喫茶)は、世界に誇る日本独自の大衆文化といえるものである。これを調査することから普遍的幸福論について考察していく。

【第2部】自由研究発表（一人発表15分+質疑応答5分）

Star Trek の Mirror Universe

— *Star Trek: Discovery* は理想主義的未来像をどのように語るのか —

川口 雅也（浜松学院大学）

一話ごとに物語が完結する episodic TV から、全15話から成る1シーズン全体に亘り物語が連続していく serialized TV へと形を変えた新たな *Star Trek* (ST) において、原作者 Gene Roddenberry の理想的な未来像の描かれ方にも変化は見られるのか。途中2か月の小休止を挟み、2017年9月から2018年2月まで配信された *Star Trek: Discovery* (DSC) の第1シーズンにおいて、配信(streaming)が再開された第10話から第13話に至るまで描かれた Mirror Universe の描写に着目することで、新たな *Star Trek* の表現の在り方を考察する。

今日では *Star Trek: The Original Series* (TOS) と呼ばれるようになった最初の ST が 1966 年に放送されて以来、そこから派生する数々のシリーズが放送され続けてきたが、それらすべてのシリーズの基盤を成しているのは原作者ロデンベリが唱えた “Infinite Diversity in Infinite Combinations” (IDIC と略称で呼ばれることの多い、「無限の組み合わせが生む、無限の多様性」という信条である。しかし、並行宇宙である Mirror Universe においては、Prime Universe と呼ばれる通常の ST の宇宙に見られる理想主義とは正反対の価値観が支配しており、IDIC という信条は影を潜めている。これは、物語が連続して語られる DSC という最新の ST は、4週にも亘り、反 ST 的世界を描き続けたということである。

また、今回は時間の制約もあり、詳しく言及することはできないが、第1話から第9話、および第14話、最終話である第15話において描かれたのは異星人 Klingon との戦争であり、その意味で、第1シーズンのほぼ全体を通じて、IDIC が体現されていない世界、つまり反 ST 的な世界が描かれ続けていたということも付け加えておく。

本発表においては、反 ST の世界観が ST で連続して描かれることが、製作者たちにとって、そして視聴者たちにとって、どんな意味を持つのかということをも明らかにすることを目的とし、serialized TV, streaming TV という媒体の在り様にも注意を払いつつ、重要な場面の映像を紹介しつつ、作り手たちの証言を主たる根拠に、考察を進めていく。

日本の教育政策と世界の教育の動向に関する一考察

－「教員免許状更新講習」受講者の意見を参考に－

白鳥 絢也（常葉大学）

本発表は、2018年8月10日（金）（於・常葉大学静岡草薙キャンパス）に発表者が担当した教員免許状更新講習（必修領域）「教育の最新事情：国の教育政策と世界の教育の動向」より、日系ブラジル人の子どもへの教育を通して考察する「世界の教育の動向」を紹介する。また、受講者の意見を解答用紙から読み取ることを通して、今後の本講習の構成や内容について検討する。

解答用紙から得た受講者の意見の一部は、以下の通りである。

- ・笠戸丸の移民の歴史的なものを自分自身をもっと詳しく知っておけば、学級の中でブラジル文化について取り上げる機会が持てたのではないかと考えています。
- ・当時、ブラジルに渡った日本人は言葉の壁もあり、大変苦勞して生活をしたと思います。今その反対の状況が日本にあり、きっとブラジルから来た子ども、文化の違いで困ることがたくさんあるのではないかと考えさせられました。
- ・夏休み明けにフィリピンから転入生が2名くるので、フィリピンについて予習することを、夏の自分の宿題にします。
- ・「ぼくは、日本語人だよ。」というエピソードは、ぐっとくるものがありました。私の考えやこれまでしてきたことは、本当に正しかったのだろうか……と初めて疑問に感じました。
- ・ブラジルの教科書から、絵だけでストーリーを考えるとということをやり、とても良い経験となりました。その絵から気付くその国の文化もあり、自分の想像力、表現力を伸ばすことができると感じました。他の方のも見せていただくことで、一人ひとりのイメージする世界も知ることができました。
- ・どの国の子ども同じ人間です。いじめられて良い人間はいません。今日受けた講義のように、お互いの文化を知る遊びを保育に取り入れ、日本人の子と外国人の子が認め合い、助け合って喜べるクラス運営をしていきたいと思います。

※本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金（平成28-30年度 基盤研究（C）

「国際化社会に生きる青少年の共生を目指した教材モデルの開発に関する研究」課題番号：16K04561，研究代表者：白鳥絢也）の助成を受けて行われたものであり、ここに謹んで感謝の意を添えます。

19世紀後半の西洋思想における「部分と全体」 ーベルクソン、ランボー、ニーチェにおける「生の全体性」の追求ー

川里 卓 (名古屋大学大学院)

本発表の目的は、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン(1859-1941)、フランスの詩人アルチュール・ランボー(1854-1891)およびドイツの哲学者フリードリッヒ・ニーチェ(1844-1900)の思想の検討を通して、19世紀後半の思想に見られる「部分と全体」という特徴を示し、彼らの思想や芸術が「生の全体性」の表現を追求する試みであることを明らかにすることである。

第一章では、ベルクソンの『創造的進化』における認識論の議論を取り上げる。ベルクソンは「知性」と「本能」、およびこれら二つを融合した認識能力である「直観」について考察している。直観は、対象を固定化して認識する知性の働きや、本能の一定の枠組みを出ない認識と異なり、自身の意識を絶えず拡張させていく認識である。「知性」の働きを部分として捉えるなら、「直観」の働きは対象を分割せずに認識する。『創造的進化』における「部分と全体」という対比がある。

第二章では、ランボーの『地獄の季節』を取り上げ、そこにみられる「部分と全体」という特徴を検討する。ランボーは一つの固定したアイデンティティを拒否し、理想を追求して放浪という立場に身を置く。ランボーの詩作には、一つの固有の領域を超えて示される、全体的生と結びつく特徴がある。

第三章では、ニーチェにおける「部分と全体」について、ティリッヒの考察を参考に検討する。ティリッヒは『生きる勇気』のニーチェについて論じたところで、「生は曖昧である」と述べている。その理由は、「生」が絶えず運動する側面を捉え、「生」を一義的に解釈することを避けるためである。常に流動する状態は概念によって明確なものとして認識されない。概念化されると同時に、「生」はその運動という側面を失い、固定化され明確な概念として扱われる。それゆえ、私たちが「生」を思考しようとする、必然的に「曖昧」なものとして現れる。したがって、「生」は曖昧という否定的な意味で捉えられるのではなく、むしろ絶えず自分自身を乗り越える存在として、肯定的な特徴を現した表現である。ニーチェは「部分と全体」という対比から「生」を捉えている。

19世紀の後半を生きたベルクソン、ランボー、ニーチェの思想および作品には、部分と全体という対比が現れている。言い換えれば、これら三人は部分との対比から生の全体性を追求した思想家や芸術家であると言えよう。

ラフカディオ・ハーン「英語教師の日記から」における翻訳の役割

風早 悟史 (山口東京理科大学)

1890年4月に初めて日本の地を踏んだラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) は、同年7月に島根県尋常中学校と師範学校の英語教師となる契約を結び、1891年に松江を去るまで勤めた。その時の体験をもとにして書かれた「英語教師の日記から (“From the Diary of an English Teacher”)」は、来日後の第一作となる『日本瞥見記 (Glimpses of Unfamiliar Japan)』(1894)に収録された。ラフカディオ・ハーンあるいは小泉八雲といえば、『怪談 (Kwaidan)』(1904)の作家として最もよく知られているだろうが、随筆や紀行文など他の分野でも多くの秀作を残している。「英語教師の日記から」(以下、「日記」と略記)もそのうちの一つである。

「翻訳」という観点からハーンの英文を見つめ直すと、その独自性がより露わになる。「日記」では、生徒の英作文や『君が代』の歌詞など、それぞれ独立したテキストがいくつも挿入されている。それらを日本語にする際、訳者はいくつかの訳し方を考えるだろう。たとえば、生徒の英作文については、まだ英語に不慣れな日本人の中学生が書いたということを踏まえるならば、訳者の技巧を凝らして、多少のぎこちなさを感じさせる日本語に訳することもできるだろう。反対に、あえて訳さずに英文のまま掲載するというのも一つのやり方である。

『君が代』の歌詞は、英訳ではなく、ローマ字表記の日本語で本文中に引用されているため、英文の中で異彩を放っている。日本語訳でその異質性を再現するにはどうすればいいのか。

日本について書かれた他のハーンの世界と同様、「日記」にも複数の邦訳版が存在する。本発表では、その中から、平井呈一と平川祐弘による邦訳を取り上げる。上で挙げた箇所を中心に両者の邦訳手法を比較することにより、まずは「日記」の邦訳の多様性を指摘する。そして、「日記」においては、翻訳が単なる情報伝達の手段を越えて、原作の重要な一面をより鮮明に浮かび上がらせる役割を果たしていることを論じる。

日米の2大学協同による異文化理解教育の取り組み

－対等な国際交流を目指して－

杉本 貴代（愛知大学 短期大学部）

本発表では、日米の2大学の協同による対等な異文化理解教育の取り組み事例を報告する。本研究の目的は、両大学が協同で実施する短期留学プログラムの効果検証の一環として、日本人学生の異文化適応と国際理解を促進する規定因の解明と、受け入れ側の米国学生にとって有益な異文化交流のあり方を模索することであった。研究対象校は中部地方の私立大学と米国の州立大学であった。調査方法は、現地プログラムでの参与観察、日米の学生対象の質問紙調査、およびインタビュー調査とし、参加者の研修記録も参考にした。日本人学生の入学時英語力、事前準備教育での取り組み状況、個人のパーソナリティ特性や経験と、現地での異文化適応や異文化理解の深化との関連を検討した。その結果、①英語力が高く開放性のパーソナリティ特性の高い学生ほど、現地での積極的な交流が可能であり異文化理解が促進されること②英語力が中程度でも、異文化交流に積極的で開放性のパーソナリティ特性の高い学生は英語を通じた異文化交流を楽しむことができること、③勤勉であるが、控えめでおとなしい学生には特技等を生かした文化交流の機会が有効で、短期間で本人の自信につながり、積極的なかわりへと変化したことが分かった。一方、④たとえ英語力が高くても神経質傾向が強い学生は、親しい現地の友だちができると交流が活発となるが、そうでない場合には消極的になることが多く、行動が制限され、不安が高まるなどの悪循環に陥るケースもあった。なお、⑤英語が苦手な学生でも、開放的なパーソナリティをもつ学生には、現地の学生との英語に頼りすぎない得意な活動（スポーツ、音楽、漫画、趣味の共有）などが現地学生とのかかわりを促進していた。以上から、良好な異文化適応には高い英語力だけではなく、パーソナリティ特性も重要な役割を果たすことが示唆された。一方、米国学生にとっては、教師が主導する授業内の交流よりも、自由時間の日本人学生との交流や、日本人学生が米国学生のために考案した文化交流が有意義な学びであったことが自由記述回答から明らかになった。

留学は、学習者の生活環境が劇的に変化する、総合的学習の場である。学びの主体である学生一人ひとりの声を聴き、学生中心のプログラムや環境作りを大学が協同で支援することで、受け入れ先の学生にとっても有益な異文化交流の場となり、対等な国際交流につながると考えられる。

大学生の多文化リテラシー及び社会人基礎力の向上について

ーフィリピンダバオ市フィールドスタディで実施した多文化教育をテーマとした ICT 授業からー

田島 喜代美（浜松学院大学／文部科学省大学教育再生加速プログラム専門員）

浜松学院大学の「フィリピンダバオ市フィールドスタディ」は、文部科学省大学教育再生加速プログラムテーマ IV の長期学外学修ギャップイヤープログラムである。浜松市は、フィリピン共和国にルーツがある子どもたちが多く在住している。平成 20 年のリーマンショック以降、日系ブラジル人や日系ペルー人など日系南米人の子どもの在籍者数は減少の傾向にあったが、近年、日系フィリピンの子どもの数は増加している。しかし、公立学校で不適応を起し、不登校や不就学に陥る児童・生徒も少なくない。日系定住外国人の教育問題は、浜松市の大きな課題の一つである。

「フィリピンダバオ市フィールドスタディ」は、送り出し地域であるフィリピン共和国・ダバオ市に大学生が赴き、ダバオ市内の公立学校である DAVO CITY SPECIAL SCHOOL (DCSS) に 1 ヶ月間滞在し、教育実習を通して、フィリピンの子どもの生育環境や教育環境を学ぶ。「フィリピンダバオ市フィールドスタディ」のフィールドワーク手法は、協同・協働学習を通して地域の課題に取り組む「PBL 型のアクティブ・ラーニング」である。

フィリピン共和国では、多様な人種、民族、社会階級、文化背景を持つ子どもに対して公正で公平な教育環境を構築する多文化教育に力を入れている。これは、教育現場で単に異なる人種、民族、社会階級、文化を認めるだけではなく、それらが変容することを前提とし、カリキュラムを改革していくことを意味している。フィリピン共和国の教育省・Region XI・Davao City Division の公立学校である DAVO CITY SPECIAL SCHOOL (DCSS) は、全国のモデル校としてインクルーシブ教育を実施している学校である。全体の 30%は、スペシャルクラスとして視覚・聴覚障がい、知的障がい、発達障がい、アスペルガー症候群、ADHD、英才教育 (Gifted And Talented) の子どもたちが、70%のレギュラークラスに入りインクルーシブ教育を実施している。

参加学生は、事前学修からプログラミングの授業の準備し、フィールドワーク期間中に DCSS の 4 年生・5 年生の子どもからプログラミング授業のために 4 Batches(選抜グループ, 1 Batch 11 名)を形成し、プログラミングの授業を実施した。また、フィールドワーク期間後にも、プログラミングによる授業を継続的に実施するため、午前中の子どもたちの授業の後に、4 Batches を担当する DCSS の先生を対象にプログラミング授業を実施した。プログラミングのテーマは多文化共生として、「ミーシャ・プロジェクト」と名付けた。文化・言語背景が異なる海外にルーツがある子どもたちが、多様性を尊重する気持ちを育むことを目的としたストーリーである。

フィールドワーク期間後の現在でも、DCSS の子どもたちと ICT を活用した授業を実施している。

本発表では、渡航前の多文化教育をテーマとしたプログラミング授業の準備段階から、フィールドワーク期間中の教育実習活動、帰国後にも継続的に実施している教育活動を報告するとともに、「ダバオ市フィールドスタディ」に参加学生の多文化リテラシー及び社会人基礎力の変化について報告する。

「中部支部」会員募集

中部支部大会『名古屋地区をはじめとする中部地方全域』
開催者募集

- 「中部支部」会員を募集しております。みなさまのご協力をお願い申し上げます。
- 今後も『名古屋地区をはじめとする中部地方全域』を範囲とし、中部支部大会を開催することを予定しております。つきましては、支部大会開催の意思がある方を募集致します。

連絡先は、以下の通りです。お待ちしております。

- 連絡先（中部支部長：白鳥 絢也）：jun-shiratori@sz.tokoha-u.ac.jp
- 同（中部支部事務局長：川口 雅也）：kawaguchi@hgu.ac.jp

中部支部をより充実・発展させていくために、是非ご協力いただきたく、お願い申し上げます。

『中部支部ニュース』第 12 号
発行：日本比較文化学会中部支部